



日本探偵小説文壇における「変格」流行について：  
大正末期『新青年』読者の視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原田, 洋将 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002567">https://doi.org/10.24729/00002567</a>

# 日本探偵小説文壇における「変格」流行について ——大正末期『新青年』読者の視点から——

原田洋将

## 1、本論の目的

江戸川乱歩は、自著『続・幻影城』に収められた「日本探偵小説の系譜」の中で、大正末期から昭和初期にかけての約十年を「日本探偵小説の第一期」と定義している。この時期には、江戸川乱歩、小酒井不木、横溝正史、夢野久作などの特徴ある作家があらわれ、日本における創作探偵小説の流行を牽引した。また、流行は大正十五年より白井喬二を中心として興った『大衆文芸』の運動とも結びつく形で広く人口に膾炙し、探偵小説は一躍メディアの寵児となるに至った。だが、当時における探偵小説の流行は果たして正しいものであったか。言い換えるならば、当時の人々が「探偵小説」として享受していたものは、本来の意味で「探偵小説」と呼び得るようなものであったのだろうか。

今日では、当時流行していた大多数の探偵小説は、探偵小説が

持つべき本来の条件（例えば、「ノックスの十戒」や「ヴァン・ダインの二十則」<sup>〔1〕</sup>で主要なテーマとなる謎の漸次的な解剖、謎解き小説としての論理的ゲーム性など）を備えていなかった、とする見方が定説となっている。当時の探偵小説文壇において、第一人者と目されていた江戸川乱歩は、初期においては「D坂の殺人事件」(『新青年』大正十四年一月増刊号)や「心理試験」(『新青年』大正十四年二月号)に代表されるような論理的思考を伴う本格的な探偵小説の執筆に力を入れたが、「白昼夢」(『新青年』大正十四年七月号)を皮切りとして怪奇文学・幻想文学の方面に流れ、以降、「人間椅子」(『苦楽』大正十四年九月号)「押絵と旅する男」(『新青年』昭和四年六月号)などの傑作を発表し、探偵小説文壇に大きな影響を与えた。小酒井不木や横溝正史、城昌幸などの作家たちもまた、怪奇小説や幻想小説、犯罪小説などに重点を置きながらも、「探偵小説作家」として大衆読者からの人気

を得た。

こういった「探偵小説」と呼ばれながらも、それ本来の条件を満たしていなかった小説の濫觴を問題視した平林初之輔は、『新青年』大正十五年二月号に寄せた「探偵小説壇の諸傾向」の中で次のように述べている。

以上の四人は、少なくとも最近においては、精神病的、变态心理的側面の探索に、より多く、もしくは全部の興味を集中し尋常な現実の世界からロマンスを探るだけでは満足しない、まず異常な世界を構成して、そこに物語を発展させようとするようなところが見える。そこで、この怪奇な、ポツシブルではあってもプロバブルでない世界の構成が、少しでも拙劣だと、作品の存在理由がよほど希薄になる。

ここに言う「以上の四人」とは、当時において精力的に創作探偵小説を発表していた江戸川乱歩、小酒井不木、横溝正史、城島幸の四人である。平林はこの四人の作風を、同論中で「不健全派」と呼び、その過剰な流行に対して警鐘を鳴らした。「不健全派」の語はさらにその後、平林と同じ不満を持った探偵小説作家・甲賀三郎によって「変格探偵小説」と呼び替えられ、定着すること

となるが、その内容はどのようなものであったか。一例として、中島河太郎編纂の『推理小説事典』の「変格探偵小説」の項には次のようにある。

日本では探偵小説を分類するのに、本格と変格という名称が長い間便宜的に使用されてきた。犯罪捜査のプロセスを主とする小説を、純正または本格の探偵小説と呼んだことから、それ以外のものに主眼を置き、探偵趣味を有するものを変格と呼んだ。

ここで中島は「変格」という言葉が「便宜的に」使われていたと述べ、それを「犯罪捜査のプロセスを主とする」「純正または本格探偵小説」以外の小説、または「探偵趣味を有する」小説であったと定義している。実際、江戸川乱歩や小酒井不木が流行を牽引した「変格探偵小説」の内部には、主に犯罪をテーマにした怪奇小説や幻想小説を筆頭として、空想科学小説や冒険小説、ユーモア小説までもが含まれており、それらすべてを含めた上で「変格」の領域を定義するならば、ここで中島が行ったような線引きを採用するほかないだろう。平林や甲賀の「不健全派」や「変格探偵小説」といった言葉には当然、こういった小説を「探偵小説」と

して扱っていた当時のメディアに対する非難の意がこめられていたように、彼らの言もむなしく、「変格」偏重の傾向はその後も強まるばかりであった。少なくとも乱歩が「日本探偵小説の第一期」と読んだこの時期においては、探偵小説の流行は「変格探偵小説」によるところが非常に大きかったと言わねばならない。

なにゆえ、論理的な謎解きを伴う本格的な探偵小説ではなく、怪奇なるものや幻想への嗜好、または、犯罪や犯罪者に対する一種の「不健全な」興味を原動力として書かれた「変格探偵小説」ばかりが流行することとなったのだろうか。従来はその背景に、エドガー・アラン・ポーの幻想小説・怪奇小説や、芥川龍之介や谷崎潤一郎といった反自然主義作家による影響を想定し、解釈する方法が一般的であった。<sup>②</sup> ポーによる影響は言うに及ばず、江戸川乱歩や横溝正史をはじめとした探偵作家らの谷崎文学への傾倒を鑑みるに、こういった考え方にはまず、間違いがないと思われる。だが、このような文学的背景から「変格探偵小説」の流行を解き明かさんとする姿勢は、自然、作家を主体とした考察へとつながりやすい。流行の背景を正確に知ろうとするならば、作家ばかりでなく、それを享受した読者の側にも目を配る必要があるだろう。

そこで、本稿においては、当時の「探偵小説」流行を作家と

もに形作った「読者」の存在を意識しつつ、論を展開させる。当時の読者が江戸川乱歩や小酒井不木の「変格探偵小説」に何を求めていたのか、彼らは当時の社会に対してどのような不安を抱いていたのか、そして「探偵小説」の流行において作家と読者が共有していた背景とは一体どのようなものであったのか。そういった点に目を向けながら、「日本探偵小説の第一期」における「変格探偵小説」の過剰流行の背景にあったものを明らかにしていきたい。

## 2、『新青年』というメディア

日本における創作探偵小説の普及は、大正九年より博文館から発刊された雑誌『新青年』の力によるところが大きい。それ以前においても、例えば黒岩涙香の「無惨」(『小説叢』明治二十二年九月)に代表されるがごとく、日本人によるオリジナルの探偵小説がなかったわけではないが、やはり読者の人気を勝ち得たのはガポリオやボアゴベといった海外作家の翻訳ものが中心で、創作が人々の注意をひく機会は非常に少なかった。

だが、『新青年』とて、はじめから日本人による創作に期待をかけていたわけではない。編集長である森下雨村は、創刊号にあ

たる大正九年一月号にてフリーマンの「オシリスの眼」の翻訳である「白骨の謎」を掲載する傍らで、日本の読者に向けた創作探偵小説の募集も並行して行ったが、枚数制限は十枚以内という非常に厳しいもので、これでは短編として秀作の出現は望むべくもなかった。同年四月号には、八重野潮路（西田政治）による「林檎の皮」が『新青年』誌上における初の創作探偵小説として掲載されたが、実はこれはオリジナルのものではなく、海外作品の翻案だというのだから<sup>(3)</sup>、投稿者の側でも真面目な執筆態度であったとは言いがたい。探偵小説専門誌として台頭し始めた頃の『新青年』の壮観を前に「夢のような感じがした」（『探偵小説四十年』）とまで述べた江戸川乱歩が、処女作となる「二銭銅貨」と「一枚の切符」の二編をはじめから同誌に送らず、まずは馬場孤蝶に宛てて評価を乞うたのも、こういった背景を考慮すれば至極当然であった。

初期の『新青年』における探偵小説の掲載は、外国作品の翻訳に頼むところが大きかったと言える。大正九年の同誌においては傍流のひとつに過ぎなかった探偵小説だが、翌十年からは徐々に誌面を占める割合が大きくなり、同年八月には増刊として「探偵小説傑作集」が発刊された。さらに十一年には年明けと夏の二回に渡って増刊号・増大号が発刊され、以後、この企画は『新青年』

の名物として定着する。翻訳された頻度が高かったのは、ポーやドイル、チェスタトンのほか、マッカレーやピーストン、ルヴェルといった作家たちで、論理的な謎解きのみならず、怪奇な事件に対する好奇心や、結末の意外性、機知のきいたユーモアなどによって読ませる作品も多く含まれていた。

とはいえ、初期の『新青年』を見ると、やはり犯罪捜査のプロセスとその論理性こそが、探偵小説における第一の要素として考えられていたことが分かる。『新青年』には、探偵小説のみではなく、日本の著名な作家による探偵小説論のような記事も掲載されたが、そこには次のような意見が頻繁に見て取れる。

全くの探偵小説と名づけ得べき物は、犯罪をば様々なクリユウ即ち手掛かりを辿って偵察し、遂に犯人を突き止めるに至る迄の分解、総合の過程を描いていくものである。

（馬場孤蝶「アランポオの研究」 大正十一年一月号）

Deus ex machina（神様仕掛）を使わず、人間の智力によって難事件（多くの場合は犯罪）を解決するのが、探偵物の特色であるとすれば、それは近代の産物であると言わねばならぬ。（長谷川天溪「探偵小説の主人公」大正十四年一月増刊号）

ここに挙げた通り、当時の知識層は探偵小説の価値を結末よりもその過程に認めており、さらにそれは「人間の智力」によって解決されなければならないものであった。ゆえに作者の都合や、安易な勧善懲悪による杜撰な筋書きは許されず、そういった要素が極力排除された論理的な作品こそが、「近代の産物」として読者に供されるだけの価値を持つ探偵小説であった、というわけである。

こういつた考え方の根底には、おそらく、明治期の探偵小説流行に対する反省と、探偵小説を低俗な娯楽として糾弾する人々に対する弁明の意図が含まれている。『新青年』の発刊以前に、日本において探偵小説が流行した例といえば、黒岩涙香の翻訳探偵小説が人気を博した明治二十二年頃〜二十六年頃にまでさかのぼることができる。涙香の小説ひとつで新聞の売れ行きが大幅に変わってしまうとまで言われたこの時期の探偵小説流行は、たしかに多数の読者を獲得しはしたが、その内容とは見ると、安直な犯罪ものや冒険ものが主流であったため、文壇からは痛烈な非難を浴びた。徳富蘇峰は「今や我邦の文学は荒れたり、探偵小説鉄道小説は、我が社会に於ける精神的糧食として、糟糠にだも如かず」（『国民之友』明治二十六年五月号）と述べ、探偵小説を文壇を荒らす低俗な娯楽として糾弾し、島村抱月は当時の探偵小説の

論理性の薄さを的確についた上で「小説は現実的と理想的とに論なく、世態人情の真を描破するものならざるべからずとせば、世に行わるる探偵小説の如きものの小説を自称するは僭なりと謂いつべし」（『早稲田文学』明治二十七年八月号）と批判した。さらには探偵小説の翻訳家の一人であった丸亭素人からさえ「若し殺人犯ありて逃走し、警吏の手を配つて之を追うもの皆な探偵小説の思考を組立つると言わば、小説の過半は皆探偵小説にあらざるなし、斯かる軽々しき探偵話何ぞ人心を取纏するに足らんや」（菊亭笑庸訳『火焰の首』序文 明治二十六年八月）と苦言されるほどに、当時の探偵小説においては犯罪捜査の過程や犯罪に向かう人間心理の描写が軽視されていた。そのため、数年の流行が過ぎ去った後には、探偵小説を俗悪で質の低い読み物として軽蔑する風潮が、人々の間には広がっていた。

編集長であった森下雨村は、このような当時の悪評を十分に理解していたゆえ、探偵小説を『新青年』の呼び物として定着させるにあたり、様々な戦略を展開させる必要を感じていた。馬場孤蝶や長谷川天溪による探偵小説論の掲載などは、まさにそういった試みの一環として考えられる。さらに雨村は、二度目の探偵小説増刊号となった『新青年』大正十一年二月増大号の編集後記「編集を終えて」にて、探偵小説掲載に対する自身の意気込みを次の

ように語っている。

単に興味の上から云つても、人間に好奇心のある限り、探偵小説は永久に読書界に迎えられるべきものである。況や高級な探偵小説にはいろいろの意味に於て我々を教え導いてくれることが多いのだ。殊に新しい科学的探偵小説などは、犯罪捜索に従事する斯道の専門家達にも一読を煩わしいと思つている程だ。

探偵小説を高級な娯楽としてばかりでなく「犯罪捜索に従事する斯道の専門家達」の参考にさえなり得る良書として喧伝せんとするあたり、当時の雨村が探偵小説の地位向上に向けた熱意がありありと伝わってくるようで興味深い。そして、同号の内容もまた、このような雨村の意気込みが十二分に反映されたものであった。「探偵小説傑作集」の名の下に、ポーの「黒猫物語」やフリーマンの「青い古代金貨」を含む十編の短編が掲載されたほか、「特別付録」と題して小酒井不木の「科学的研究と探偵小説」、警視庁鑑識課技師・乙葉辰三の「犯罪の科学的研究」、馬場孤蝶の「最近読んだ探偵小説」、井上十吉の「著名な探偵作家と作物」の四編の随筆が寄せられ、文学的方面、科学的方面から、『新青年』

が供する高級娯楽としての探偵小説の価値を補強している。この四人の中でも、特に小酒井不木は『新青年』の常連寄稿者として同誌の発展に多大なる貢献をもたらし、後に雨村から「日本の探偵文壇を今日あらしめた功労者」（『日本探偵小説発達史』『文学時代』昭和四年七月号）「まったく日本の探偵文学育ての親である。」（『探偵作家思ひ出話』『新青年』昭和二十四年九月合併号）などとして、賛辞を送られるに至った。

では、『新青年』におけるこのような翻訳探偵小説の掲載を、当時の読者はどのようにして享受していたのだろうか。こころみに、初期の『新青年』に設けられていた読者投稿コーナー「誌友倶楽部」を見ると、やはり探偵小説に関連した投書は頻繁に見ることが出来る。そこからいくつか拾ってみるならば「渴望せる怪奇探偵号！百頁に互る傑作探偵小説記者の努力と苦心を感謝せずには居られなかつた。」（大正十年五月号）「増刊探偵小説傑作号ああ何という表紙の美しさだろう。又其内容の充実さよあまり面白さに僕は一冊読み通してしまいました。」（大正十年十一月号）といった調子で、甚だ好意的なものが多い。一方で、「少なくとも新青年と云う意味に於て近代の青年は探偵作品を歓迎していませんるか、恐らくそうではないだろうと思います。」（大正十一年十二月号）というような、探偵小説の掲載を懐疑的にとらえる意

見もしばしば見られるのだが、全体としての評判は概ね良好であつたと言えるだろう。中でも、特に目にとまるのは次に挙げるような意見である。

私は今迄探偵小説は空想的な詰らぬモノと許り思つて居ましたが新青年を手にしてからその有意義なのに創作としての新方面あるを知り得ました。  
(大正十年六月号)

自分は本誌連載の高級探偵小説を愛するものである。探偵小説を非芸術的だと冷笑するならするがよい。訳のわからぬ者には説明したつて駄目だから。そんな奴に限つて探偵小説と云えばすぐ活動の活劇を連想する位の頭しか持つていないだろう。  
(大正十一年一月号)

新青年一月号及増刊号の予告を見て思わず歓喜の叫びを發した。素敵!!素敵!!大好物の高級探偵小説の粒揃いだ。吾輩は諸雑誌の内です第一番目に映るのが探偵小説だぐくだらない活動写真的のは大嫌いだ。だから高級なる新青年を愛読する所以である。  
(大正十一年二月号)

いずれも、『新青年』が誌上に掲載する探偵小説を、従来のものと比較してしきりに褒めそやしたり、「高級探偵小説」の語を与えて巷の探偵小説と一線を画さんとするような意図がうかがえるものである。ポーやドイル、フリーマンなどを原書として質の高い翻訳作品の掲載につとめ、さらには著名な文壇人や専門家の意見を借りて探偵小説の価値を向上せんとした雨村の試みは、ここに挙げたような読者からの反応を見るに、まず成功をおさめていたといえるだろう。その一方で、従来の探偵小説を「空想的な詰らぬモノ」「くだらない活動写真的」などとして貶める彼の姿勢には、たとえそれが「高級」であつたとしても、「探偵小説」と名のつくものを読むにはどこか気恥ずかしさを感じなければならなかつた当時の読書事情が、少なからず反映されているものと思われる。

### 3、小酒井不木と『新青年』

当時の青年たちが『新青年』の探偵小説に惹かれる一方で、やはり心のどこかでそれを「低俗」として見なければならぬ心理的ジレンマを抱えていたとすれば、そういった読者のうしろめたさを解消する役割を担っていたのは学問の力であつた。特に、医



学博士として探偵小説に関連する随筆を度々投稿した小酒井不木は、自身の豊富な専門知識をいかしてこの方面で最も大きく活躍し、昭和初期の『近代犯罪科学全集』(武俠社)や『防犯科学全集』(中央公論社)などの発刊に見られる「犯罪科学」流行の地下づくりにも貢献した。

不木が『新青年』に顔を出したのは、先にも触れた『新青年』大正十一年二月増大号が初である。ここに掲載された「科学的研究と探偵小説」を皮切りとして、以後、「免疫の話」(大正十一年四月増大号)「血液の秘密」(大正十一年八月増大号)などの科学的随筆を度々誌面に寄せ、さらには「毒及び毒殺の研究」(大正十一年十月号)「十二月号」などの連載記事の執筆も担当した。医学者としての専門知識だけではなく、自身の広範な知識に基づいてさまざまな情報を随筆中に盛り込んだ点が不木の特徴であり、「血液の秘密」を例にするならば、まずは「古代人は赤色のみを感じ、青色を感知することができなかったのではないか」という説が過去に学界にて唱えられた話を導入として、古代人と血液の迷信的關係、西洋の神話や文学作品における血液の異様な役割、各国において血液が薬として用いられた例の紹介、動物の血液を通して毒に対する免疫を得んとした古代人の逸話、血液を通した法医学鑑定の詳細、現実の血液鑑定と探偵小説中の鑑定との相違

にまで話題は及ぶ。さらに「毒及び毒殺の研究」では、フランスの毒殺魔ブランヴィリエ侯爵夫人とセントクロワの犯行を紹介する段にて、架空の会話を交えた小説のような記述法を採用し、読ませる工夫を凝らしている。このように、単に学者としてではなく、常に読者の視線を意識し、随筆家として読んで面白い記事を提供せんとつとめた姿勢が、不木の人気の根底にあったといえるだろう。

そんな不木の『新青年』誌上での功績を代表する随筆が、「毒及び毒の研究」に続いて連載された『殺人論』(大正十二年三月号)「十一月号」である。文字通り、興味の対象を「殺人」及び「殺人者」そのものに絞り込んで書かれたこの随筆は、当時の『新青年』に掲載された記事の中でもかなり特色あるものであり、その内容を見ると、原始部族における殺人の記述に始まって、迷信殺人や人肉嗜食といった特異なる殺人の紹介、ロンブローゾの生来的犯罪者説に関連した犯罪者の容貌考察、女性犯罪者の残酷性への言及、屍体の保存方法や殺人方法の詳細な解説にまで及ぶといった調子で、今日の我々の目から見てもかなり刺激が強い。人肉食や殺人淫薬に関する、ともすれば胸が悪くなるような記述をも含んだ「殺人論」は、エロ・グロ・ナンセンス文化の台頭を目前に控えたこの時期の『新青年』を考察する上では、記念碑的な

作品としてみなすことも可能である。

とはいえ、編集長である森下雨村はおそらく、そのような意図のもとに『殺人論』を掲載したわけではなかった。『殺人論』の第一回が掲載された『新青年』大正十二年三月号の編集後記「編集局から」には、次のような一文が見られる。

本号から愈々小酒井博士の「殺人論」を掲載する。予告にも述べたとおり、犯罪科学ならびに犯罪文学に互る博士近來の大論文であつて、恐らく在來發表された斯種の研究中最も注目すべきものであらう。敢て諸君の精読を煩わす所以である。

「犯罪科学ならびに犯罪文学に互る博士近來の大論文」として『殺人論』を紹介する雨村にとつて、不木の筆による殺人の紹介はただ血なまぐさいばかりのものではなく、専門知識を備えた学者による意義のある論考であり、世上における探偵小説の評価を高らしめるにも意味のないものではなかった。大正十一年二月増大号にて、「犯罪捜索に従事する斯道の専門家達にも一読を煩わしたい」と氣を吐き、医学博士や文学者といった各方面の専門家に随筆の寄稿を依頼した雨村の探偵小説の地位向上への志は、こ

の時期においても変化していなかったとみるのが至当であらう。雨村は、不木の筆による殺人や犯罪の研究を、怖いもの見たさで読む悪趣味な読み物としてではなく、探偵小説をより深く理解する上で多大な効果をもたらす立派な学問として、誌面に導入したので。

読者もまた、学問の方面から探偵小説の価値を擁護する専門家の存在を歓迎した。特に、不木の人氣は相当なもので「誌友倶楽部」を見ると、「毒及び毒殺」を拝読して小酒井博士の博学には驚き入った。」（大正十二年二月号）というように、その該博を讃える意見が頻繁に見られる。さらに「殺人論」に至つては「小酒井博士の『殺人論』は少なからざる興味を以て再三再四精読した。」（大正十二年四月号）「博士の深遠なる理論と該切なる例証は日々新聞記事に見る三面記事の殺傷事件の真相を把握するの鍵であり、延いては亦探偵小説の忠実なる理解者である。」（大正十二年五月号）といった調子の賛辞が幾通も寄せられ、ついには編集の方で「小酒井博士の論文は賛辞を寄せられる方が随分ありますが一々載せられませぬ故左様御承知下さい。何しろあれだけの研究は外国にだつてありません。」（大正十二年五月号）と断りをいれねばならない程であつた。

#### 4、『新青年』と『変態心理』

『殺人論』の掲載以降、随筆における不木の興味は、殺人や犯罪者そのものに対して傾いていく。「青髭」ことジル・ド・レヤ切り裂きジャック、結婚詐欺を働き多くの女性を殺害した時計師ペル、ランドルーなどの海外の犯罪者の紹介にて、不木は再び健筆をふるった。さらに、それにあわせるようにして、当時法医学や心理学の分野で活躍していたその道の専門家たちが『新青年』誌上に犯罪をテーマにした随筆を寄せた。寄稿者の中には、のちに武狭社より出版される『犯罪科学』をはじめとしたメディアにて執筆を担当した浅田一や古畑種基、高田義一郎なども名を連ねており、まさに昭和初期のエロ・グロ・ナンセンス流行に向けて、あがり始める狼煙を見るようである。

そんな中で、『新青年』における学問のあり方にも変化がみられるようになる。『新青年』の学問記事はもともと、作中の探偵が行う科学的捜査や、毒物の分析に対する理解の一助として導入されたのであり、そこでは、自然科学や法医学などが主として俎上にあがるものであった。ところが、その興味が犯罪捜査を行う探偵ではなく、犯罪そのものを行う犯罪者の方へと傾くと、その異常な心理状態をより深く読み解くための学問として、心理学が

採用されるようになる。とくに、クラフト・エヴィングの提唱したサディズム・マゾヒズムなどは好んで扱われ、不木も以下に挙げるように、随筆中でこの概念に度々ふれている。

火焰によって物が破壊され、人の命が破壊されることを見るのは、サヂストに取りてはいうに言えぬ快感を与うるものであって、史上に名高いローマの暴君ネロがローマを焼いたのも、畢竟彼がサヂストであったからである。(中略) 原始時代において、火と毒とは二天脅威であつて、早くもこの二つは人の性的生活と密接の關係を持つに至つたが、この傾向が遺伝的に、毒殺及び放火として、現今においても、変態性欲者を満足せしめて居るのである。

〔性犯罪と探偵〕 『新青年』大正十三年八月号)

暴君ネロがローマに放火したという伝説を紹介しつつ、その行動を「サヂスト」ネロの加虐嗜好癖と結び合わせている。そして、炎や毒物といった、人の命を破壊につながる脅威に対する嗜好は、世代を超えて遺伝し、それが現今の「変態性欲者」をも満足させている、というのである。

さて、ここでは「サディズム」の概念と合わせて、「変態性欲者」

という言葉が登場した。この「変態性欲者」及び「変態」という言葉もまた、『新青年』上の犯罪者紹介随筆にて非常によく使われたものであった。例えば、『殺人論』中の一項目「変態なる生理的又は心理的欲望に基づく殺人」には、次のような一文がある。

変態なる生理的欲望に依る殺人としてここに記載するのは、人肉に対する異嗜に依る殺人である。平たく言えば人肉の肉が喰いたいために人を殺した例を言うのである。(中略)

人肉を食することは、心理的変態者特に変態性欲者に見らるるところである。かかる殺人は生理的変態即ち異嗜よりも寧ろ性欲錯倒がその主因となっている。

〔『新青年』大正十二年四月号〕

この後、不木は海外における人肉嗜食の傾向が見られた犯罪者の例を複数紹介した上で、「かくの如き殺人は『殺人淫楽』と名付けられて、変態性欲の一種なるサヂズムに属せしめられている」と結び、ここにもまた、「サヂズム」が登場する。続いてもう一例、「変態」が扱われた記事として、浅田一の「変わった男と女」から次の一文を抜粋する。

お梅は書を能くし教育は末吉よりもあつたらしい。然し色里に使奉公している間に自然と変態性欲的の教育を受けたものと見える。(中略) 異性から軽く触られたり、叩かれたり、時には少々ヒネられても愉快を感じる事は常人にも有ることであるが血を見たり、火傷をしたり指が飛ぶ程の痛み苦しみには常人は堪えられないのである。こんなことを快と感ずるのは病的の人に限るのである。(『新青年』大正十五年六月号)

これは、サヂストとマゾヒストの合意殺人として今日まで知られる猟奇事件「小口末吉サドマゾ事件」の顛末を扱った一文である。この事件では、マゾヒストであるお梅が、愛人の末吉に「火箸で身体を焼かせる」「指を切り落とさせる」などの過剰な責めを要求したあげく、身体への無理がたたって命を落とした。浅田は、そんなお梅を「変態性欲的」、すなわち、過剰なるマゾヒズムの欲望にとりつかれた「病的の人」として、読者に紹介している。

以上、例として挙げた記事に共通して言えることは、「変態」や「変態性欲」といった言葉が、それに取りつかれた人々を常人とは決定的に異なった「異常者」として排斥するためのレッテルとしての機能をはたしている、ということである。「変態」という言葉が即ち、過度な偏執や性的倒錯と容易に結びついてしまう

現代の我々の感覚からすれば、「異常」を宿した人間を常人とは決定的に異なる存在として囲い込み、軽い見世物のようなイメージで読者に紹介する『新青年』の「変態」記事は、さして違和感がないものとして映るかもしれない。ところが、不木や浅田の記事が載った大正末期における日本では、「変態」はレットルとして機能する一方で、学問的な意義を有する言葉でもあり、ある程度の問題意識をもって語られる言葉でもあった。

日本において、学問的な方面から「変態」へアプローチをかけた代表的な例といえば、中村古峽による『変態心理』の発刊が挙げられるだろう。『変態心理』は、中村古峽が立ち上げた「日本精神医学会」の機関誌として、大正六年十月から大正十五年十月まで、足かけ十年にわたって刊行された。執筆者には中村古峽のほか、柳田國男や井上円了、幸田露伴や福来友吉といった著名人、さらには小酒井不木も名を連ね、発刊に際しては「極めて真面目なる研究的態度を持せる学術雑誌也」（『東京日日新聞』大正六年十一月六日）などと紹介されるような、学術的意義の高い雑誌であった。そんな『変態心理』において、「変態」とはどのような考えられ、どのようなアプローチを望まれる存在であったのか。中村古峽が創刊号に寄せた「発刊の辞」を見るならば、それは次のように語られている。

変態心理学に所謂変態は、正常心理学に所謂正常と相對して用いられている言葉ながら、強ち病的の意味すべきものではありません。それが単に原則に對する例外と云うだけの意味であり、単に尋常に對する異常と云うだけの意味でもあり、單に凡庸に對する非凡と云うだけの意味でもあり得べきことを忘れてはなりません。

（『発刊の辞』 『変態心理』 大正六年十月創刊号）

ここに見る通り、「変態」という言葉を即ち「病的」に帰するのではなく、「単に原則に對する例外」として設定し、様々な分野に對して間口を広くかまえるというのが、『変態心理』刊行にあたって古峽が示した基本理念であったようだ。加えて言うならば、古峽が定義した「変態」には、犯罪者や性的倒錯者の有するような異常心理だけではなく、歴史上の偉人や天才と呼ばれた人々が有していたとされる他者との著しい相違までも含まれており、それは決して、マイナスの意味のみに使われるものではなかった。実際、古峽の理念を反映するがごとく、『変態心理』には、欧米心理学の紹介から、犯罪心理の研究、催眠術、歴史上の狂人、または天才の研究、多重人格者の治療報告、宗教や迷信の

解剖、千里眼を始めとした超能力の研究まで、実に様々なジャンルに属する記事が寄せられることとなる。

さらに『変態心理』においては「古峽の言うところの「常態」と「変態」の区分をどこに設けるか、という問題意識が常に働いていた。例えば、創刊号に続く大正六年十一月号の巻頭にてすでに上野陽一が、「氣違いと氣違いでないものとの区別は決して判然たるものではない。もう少し強く言えば、恐らく何処かに少しでも氣違いじみた点の、僅かでもないものはないと言った方が、事実に合っているのである。」（「正態と変態」 『変態心理』大正六年十一月号）と述べたことなどは、象徴的と言えるだろう。

そして、このような、「常態」と「変態」の間に断定的な区分を設けず、それを単なる程度の問題に帰する姿勢も、大正期においてかなり普及していたのではないかと思われる。『新青年』においては「人肉嗜食」などの異常行動とあわせて「変態」を使用した不木もまた、別のメディアに寄せた記事では、その冒頭において「どこまでが常識心理で、どこまでが変態心理であるかというところを、はつきりと区別することは、何人にとりても不可能である。（中略）何人にも本来、善悪の両性質が具わって居るのであって、どちらかが強くあらわれるとあらわれぬによって、善人と悪人が区別されるに過ぎない。」（「変態心理と犯罪のいろいろ」

『東京』大正十三年九月号）と述べている例などからも、そのことは伺えるだろう。

このような視点から行う「変態心理」の研究が、精神を患った者に対する過剰な差別や排除の抑制を目的としていたことは間違いない。だが、こういった考え方を受け入れるということは反面で、自らの「常態」を信じて疑わなかった人々が、実は、ふとしたきっかけから、自分たちが排除してきた「変態」に傾きかねない脆い存在であるということも認め、ことでもあり、その不安に直面しつつ生きていかねばならない、ということでもあった。

そういった不安に駆られたり、実際に「変態」と考えられる状態を経験することで『変態心理』に興味を持った読者も一定数存在していたようで、大正十年十月号・十一月号に掲載された読者投稿企画「変態心理の研究に興味を持った動機」などを見ると、かつて性欲に負けて墮落してしまった自分の心理と、自分を墮落させた人間の心理を正確に知るために同誌の購読者となった「野崎吉郎」なる人物や（墮落の心的体験を経て）大正十年十一月号）、過去に自分の身に起こった失敗を「不合理的心理状態」によるものと考え、他者におこる不合理的心理とあわせてそれにより深く研究しようとしている「山口儀正」なる人物（「社会の一員としての必要」大正十年十一月号）などが、自らの体験談

からなる記事を寄せている。

このように、「変態」をあらゆる人間の身に起こりかねない精神の異常として理解し、それに対する理解を深めることで、自らの修養を高めるための一助とせんとして接する態度は、殺人鬼や色情狂などを取りあげた上で「変態」を紹介した『新青年』における随筆家たちの態度とは、まったく趣を異にするように思われる。

とはいえ、浅田一の紹介した小口末吉サドマゾ事件に見るがごとく、レットルとしての「変態」のもと紹介されざるを得ないような犯罪者たちが、国内において既に存在していたこともまた、事実である。とくに、不木をはじめとする随筆家がジル・ド・レヤベルやランドルーなどといった海外の異常犯罪者に関する記事を『新青年』に寄せていた大正末期は、頻々として起こる「猟奇事件」が市井の注目を集めた時期でもあり、レットルとしての「変態」ももはや、他人事ではなくなっていた。

バラした死体をトランクに詰めて川に流すという猟奇性と、犯人が東京帝大出のエリート官僚であった点で話題を呼んだ山田憲の「鈴弁殺し」事件。慢性的に窃盗・暴行・殺害を繰り返したあげく、尼僧ばかりを標的に六人もの命を奪い、「尼殺魔」の名で恐れられた大米龍雲。十八歳の頃に犯した婦女暴行殺人を皮切り

に、出獄後も強姦と殺人を繰り返し、最終的には六人もの若い女性を殺害した吹上佐太郎。さらに人々は、大正十二年の関東大震災の現場における自警団の朝鮮人虐殺事件を通して、普段は「常態」なる者が、ふとしたきっかけから「変態」に分類されるような極めて異常なる行動へと傾いてしまった例すらも、国内にて体験することとなった。

このような、人々が己の正常にすら不安を抱かねばならなかった時代背景において、不木をはじめとした専門家が『新青年』にて紹介した「変態」犯罪者たちの凶行は、それが心理学や法医学といったレンズを通して分析されるものであればこそ、立派な「学問」の範疇に分類されるものとして価値を有したのであり、彼らが抱いた心理的不安を解消する装置としても機能するものであった。

ところが、「変態」のレットルのもと、「常態」なる人々とは決定的に異なった存在として紹介された犯罪者たちを、創作の世界においても安易に登場させてしまった場合、それは痛烈な批判の対象ともなり得るのである。

## 5、「変格探偵小説」の勃興

『二銭銅貨』（『新青年』大正十二年四月増大号）によって江戸川乱歩が登場したことで、日本探偵小説の歴史は大きな転機を迎えることになる。従来は海外作品の翻訳が主流であった『新青年』も、この頃からだんだんと国内産探偵小説の発掘に力を入れ始め、乱歩のほか、甲賀三郎や大下宇陀児、山下利三郎といった作家の創作が誌面を賑わせた。さらに、乱歩が「D坂の殺人事件」「心理試験」にて専業作家として本格的にデビューした大正十四年からは、『新青年』における日本人の創作の割合も飛躍的に伸び、大正十五年の新年増大号においていよいよ、「探偵小説創作集」と銘打った日本人作家による創作の特集が組まれることとなった。とはいえ、純粋な謎解きの要素を含んだ作品を書いた作家は少なく、「探偵小説」の名のもとに発表された怪奇や幻想、ユーモア小説の跋扈が、大正末期から昭和初期にかけての「変格探偵小説」流行の温床となったことは、先にもふれた通りである。創作に対する熱気が高まる中で、不木もまた、『新青年』大正十四年八月増刊号にて「按摩」と「虚実の証拠」の二作を寄せた。それを皮切りとして、以後「痴人の復讐」（大正十四年十二月号）「恋愛曲線」（大正十五年一月号）「安死術」（大正十五年四月号）

などなど、医学者としての専門知識と目線をいかした犯罪小説、怪奇幻想小説の執筆に筆を染め、『新青年』のみならず、『探偵趣味』『大衆文芸』『キング』ほか、多くの雑誌に寄稿した。昭和四年、数え年にして四十歳という若さで夭折したため、文筆に専念した期間は八年足らずと短いものだったが、死後、改造社より出版された『小酒井不木全集』は全十七巻にも及び、不木の筆力の旺盛さを物語っている。だが、そこに収められた作品は、全てが『殺人論』の如く、読者からの喝采を以て迎え入れられたものではなかった。

例えば、『新青年』大正十四年十月号に掲載された「手術」などは、非難に晒されたものの一つである。胎児を子宮繊維腫であると誤診した産婦人科医が、己の医療ミスを隠蔽するためにその胎児を掌に握りこみ、助手のいないところで隠れて食すという、非常にグロテスクな発想を含むこの作品は、医学に通暁した不木ならではの医療ホラー、または、専門性の高い職業にこそ含まれる外部への秘匿性、権力を手にした人間がそれに執着する際の狂気と醜さを克明に抉ったものとして、読むこともできる。だが、やはりその過激な内容が嫌悪を読んだのか、掲載の翌号にあたる『新青年』大正十四年十一月号の作品批評欄「マイクروفフォン」を見ると、「エン魔大王」という匿名投稿者が「小酒井氏へ」と題し



て次のような意見を寄せている。

増大号が出たので、第一に小酒井氏の「手術」を見る。何というキタナイことを書くんだらう。(中略)一般の人士が衆人の面前で口にするをはばかりようなことを何の臆面もなく、乃至は得々として筆にしているのは呆れるの他ない。あつた方面のことが新聞や婦人雑誌に書かれてあり、多くの婦人がそれを平気で読んでいるらしいのを苦しいことに思っている私には、それがどんなに傑作であっても、この種の材料を扱ったもののことは口にしたくない。

増大号を手にして、第一に「手術」を読んだと語るこの投稿者は、やはりそれなりの期待をもつて、不木の作品に接していたと思われる。だが、読後に抱いた印象は、ただただ「キタナイ」というものでしかなく、こんなことを喜々として書いている作者に対しては「呆れるの他ない」というのである。題を「小酒井氏へ」として、個人を名ざす形で批判を加えている点もまた、「マイクロフォン」に寄せられた投稿の中ではかなり異例なのだが、作者をここまで徹底的に貶めた例は、同投稿欄においてはほかに見られないと言つていい。かつて『殺人論』や『毒及び毒殺の研究』

を連載し、多くの読者によりその博学を讀えられた医学博士・小酒井不木からは考えられないほどの手厳しい評価だと言えらるう。

このような読者からの意見は、一体何に起因するものなのだろうか。もちろん、「胎児を食す」という異常な行為にて、それを説明することは可能である。ただし、エロ・グロ・ナンセンス流行の黎明期とも言えるこの時代においては、ともすれば生理的嫌悪感を抱きかねないグロテスクなテーマこそが、人々からの喝采を以て迎え入れられたこともまた、事実であった。『新青年』に寄せられた中にも、妹尾アキ夫の「恋人を喰ふ」や水谷準の「恋人を食べる話」、夢野久作の「人間腸話」など、「食人」というグロテスクなテーマに対する人々の興味を惹きつけるような意図が題材から感じられる作品が散見するし、江戸川乱歩もまた、長編「闇に蠢く」の連載に行き詰った末、場をもたせるために人肉嗜食という過激なテーマを作に取り入れたことを、『探偵小説四十年』などの回想録にて告白している。

にも関わらず、不木の作風は、なにゆえ読者から、このような痛烈な非難を浴びることとなったのだろうか。例えば、『新青年』大正十五年二月号にて甲賀三郎が「横槍一本」の題で「マイクロフォン」に寄せた次のような批評は、その答えの一端をあらわし

ているように思われる。

小酒井氏の『痴人の復讐』は遺憾ながら頂戴できません。復讐の爲めに患者の健眼をくり抜かせて、手術者を自殺さし、一石二鳥を得ると云うのですが、只空恐ろしい事と云う感より外はありません。主人公が大それた事を何の自責の感なしでペラペラと述べているのも不愉快です。主人公の心理にもう少し煩悶はなかったのでしょうか。異常精神と云えばそれはそれ迄なのですが、それならそれで、始めからトリックなほど隠さずに、患者の健眼にズブリとメスが入った時の悪魔的快感の描写がして欲しかったです。

ここで組上りが上がっている「痴人の復讐」(『新青年』大正十四年十二月号)もまた、不木の特徴ともいえる医学的恐怖が横溢した作品であった。師事する教授から「痴人」と呼ばれ続けた男が復讐のため、手術前の緑内障患者にかけられたガーゼを左右逆に配置し、何も知らない教授に健眼をくりぬかせて身の破滅へ追い込むという筋なのだが、教授への復讐のためにほとんど罪のない患者の健眼を犠牲にしたというのに、ここで甲賀が述べているように、それを語る「痴人」の男の口調は軽々しく、罪悪感など微

塵も感じられない。こういった、作中人物の犯罪をはじめとした悪への透徹こそが、不木の創作における特徴であると同時に、弱点ともなり得るものであった。

「手術」にて描かれた、胎児を食す産婦人科医にせよ、「痴人の復讐」にて、自らの都合でなんのためらいもなく二人の人間を破滅させたこの男にせよ、彼らには、普通の人間が犯罪を犯さんとする時に感じざるをえないような煩悶の情がまるで存在しないのであって、そこにはまるで、かつて不木が「変態」のレットルのもとに紹介した異常犯罪者たちの姿を見るようである。もちろん甲賀の言う通り、こういった煩悶のない超人的な犯罪者たちを「異常精神」という言葉で囲い込んだならば、「それはそれ迄」としてかたづけられることもできただろう。だが、創作におけるそのような態度こそが、「不健全派」を唱えて探偵小説の行く末を憂慮した平林初之輔が「探偵小説壇の諸傾向」にて危険視したところの、「異常な世界」の「拙劣」な描写にはかならなかつたのではないだろうか。

一方で、超人ならざる人間の精神的脆さに深く切り込んで、犯罪に傾くまでの煩悶と恐怖を追及したのが、勃興期の探偵小説文壇において第一の作家として活躍した、江戸川乱歩であった。中でも白眉として拳がるのは、高等遊民・郷田三郎が、ほとんど無

動機ともいえる犯罪を犯すまでの心理的煩悶を描いた「屋根裏の散歩者」（『新青年』大正十四年八月増刊号）であろう。

冒頭で「多分それは、一種の精神病でもあったのでしょ」と紹介されるほどに、何をやっても世の中を楽しめない二十五歳の青年、郷田三郎は、ある日、カフェで探偵・明智小五郎と出会い、犯罪譚の蒐集という、これまでになかった新しい楽しみを教えられる。「同僚を殺害して、その死体を実験室のかまどで灰にしてしまおうとした、ウエブスター博士」や、「数多の女を女房にしては殺して行つたいわゆるブルーベアド（青髭）のランドルー」などといった、『新青年』誌上で度々取り上げられた犯罪者たちの逸話に淫するがごとく取りつかれる男、郷田三郎は、当時の読者にとっては、自分たちの姿を二重写しにした人物としても受け取られるものであったに違いないが、ただのおとなしい犯罪実話マニアであった三郎が、下宿先の「東栄館」にて、「屋根裏の散歩」という新しい快楽に目覚めてしまったことから、事態は急転する。下宿内において「屋根裏」という特権を得た三郎は、はじめはそこに空いた節穴から隣人たちの生活を覗き見、表では決して見せることのない裏の顔に接してほくそ笑んでいれば、それで満足であった。ところが、そんな三郎がある時、ふとしたきっかけから「屋根裏の散歩」を利用して、実際に完全犯罪をやってみよう

と思いつつのだ。

標的となったのは、同じ「東栄館」の住人である、遠藤という男であった。過去に恋人と情死をしかけた話などをさも自慢らしく語り、その際に用意したモルヒネを見せびらかして喜ぶこの遠藤という男に対して、三郎は初対面の頃からなんとなく、虫の好かぬ思いをしていた。そんな三郎が、遠藤の部屋を屋根裏から覗き見ていた際に、次のような、ちよつとした悪戯を思いつく。

そうして、遠藤の寝顔を見ている内に、三郎はふと妙なことを考えました。それは、その節穴から唾をはけば、丁度遠藤の大きく開いた口の中へ、うまく這入りはしないかということでした。なぜなら、彼の口は、まるで詭えでもしたように、節穴の真下の所にあつたからです。

（中略）

併し、まさか本当に唾を吐きかける訳にも行きませんので、三郎は、節穴をもとの通りに埋めて置いて、立ち去ろうとしましたが、其の時、不意に、チラリとある恐ろしい考えが、彼の頭に閃きました。彼は思わず、屋根裏の暗闇の中で、真っ青になって、ブルブルと震えました。それは実に、何の恨みもない遠藤を殺害するという考えだったので。

その顔を見る度に、「何だかこう背中がムズムズしてきて、彼のつべりした頬つべたを、いきなり殴りつけてやりたい」というような、暴力的な衝動を抱かせる遠藤が、やはり三郎にとつてどうにも気に入らない大口を開けて、呑気に寝入っている。そこに唾を落としてやろうと思いついた三郎は、猿股の紐を穴から垂らすなどして目算を定めるのだが、結局それは単なる悪ふざけとして、実行に移すことはなかつた。ところが、そこを立ち去ろうとした時に「不意に、チラリとある恐ろしい考えが」三郎の脳裏をよぎる。それは、その穴から唾のかわりに、毒液を垂らして、遠藤を殺してしまおうというものであつた。

いくら虫が好かないとはいへ、三郎にとつて遠藤は何の恨みもない、赤の他人に近い存在である。だが、彼が相手ならば、確実に完全犯罪が可能である。なぜなら、遠藤が例の情死の際に用意したというモルヒネを盗み出し、屋根裏から垂らして瓶を死体の隣に落としておいたなら、誰が見ても、彼の自殺は明白であり、それを疑う者などいようはずがないからだ。

持つて生まれた犯罪嗜好癖と、普通人として備えた良識の間で、三郎は葛藤し、煩悶する。さらに、実際にモルヒネを盗んで、それを水とくわして毒液に仕立てた際には、「何の恨みもない一人の人間を、ただ殺人の面白さに殺してしまうとは、それが正気の

沙汰か。お前は悪魔に魅入られたのか、お前は気が違ったのか」と自分自身に問いかけ、自らの異常心理に対して恐怖の念を抱く。別の日に遠藤の部屋に向かつて、彼が以前と同じ位置で口を開けて寝ているはずはないと気が付いた時は、「お陰で俺はもう、恐ろしい殺人罪を犯さなくても済むのだ。ヤレヤレ、助かった。」と、一旦は胸をなでおろすものの、その後の屋根裏の散歩の際にも必ず毒液を携帯することを忘れず、「おみくじでも引くような心持で」、遠藤の部屋の節穴を毎日、のぞき込む。そして、ついにある日、以前の位置と寸違わぬ場所で大口を開けて眠る遠藤に遭遇した三郎は、「遂にその時が来た喜びと、一方では言い知れぬ恐怖と、その二つが交錯した、一種異様の興奮」に震えながら、毒薬の瓶を取り出し、屋根裏から狙いを定めてポトリポトリと三滴だけ、垂らしたのであつた。

このように、正常な状態から犯罪という異常に傾いてしまう人間の心理の揺らぎを、執拗なまでに描写した点が、乱歩の作家的特徴だと言えるだろう。「罪と罰」のラスコーリニコフを思わせる動機から犯罪を犯した落屋清一郎の、犯罪隠蔽と発覚までの心理的動向が綴られた「心理試験」や、作業中のふとした思い付きから、これまでは思いもよらなかつたような犯罪に手を染め、人外の恋へと身を落とす「人間椅子」の椅子職人。または、恋慕の

情を思い人に嘲笑されたことがきっかけとなって、彼女の殺害を決心することとなった「虫」（『改造』昭和四年九月〜十月号）の榎木愛造など、本格的な探偵小説から、「変格」と呼ばれた怪奇小説、犯罪小説に至るまで、乱歩の描こうとした異常犯罪者たちの背後には、ほとんど全ての人間が少なからず抱える精神的な弱さや、抑圧された暴力への欲望、犯罪や殺人といった「悪」に対する好奇心などが、一貫して垣間見られるのである。

## おわりに

「屋根裏の散歩者」を例に挙げてきたような、犯罪者心理の精緻なる描写は、当時の作家や批評家にとつて、最も評価すべき乱歩作品の特徴であった。「変格探偵小説」の過剰流行を警戒した平林初之輔も、乱歩の描く犯罪者の心理描写は高く評価しており、例えば『新青年』大正十四年十月号に寄せた「心理試験を読む」では、「異常心理の描写物」を「氏の最も得意とする」ものとして認めた上で、それが「鳶のようにしっかりと人生にからみついていなければならない」、すなわち、ほぼ動機のない犯罪者に、犯罪を行うまでの必然性を持たせることを要求した。また、平林と並んで、乱歩を最も意識させた評論家である橋爪健は、『新小説』大

正十五年四月号の「江戸川乱歩論」の中で、乱歩作品の傾向を「卑近ではあるが普遍的ではなく特殊の特殊であり、従つて極めて空想的、非現実的であるにも拘らず、その非現実性には不思議な実感が伴っている」と指摘した上で、その世界観を構成する三本の柱の第一のものとして「心理描写の的確刻明なる事」を挙げている。こういった、心理描写が紡ぎだす乱歩作品のリアリティは読者からも評価されていたようで、例えば『新青年』大正十五年七月号の「マイクロフォン」では、「名柄みどり」なる一般読者が「小酒井さんは学者で芸術家ではないのですからあたしはそのつもりで読んでいます。（中略）江戸川さんは小説家ですから主観が燃えています感情が旋律となつてうづまきます」と、不木と乱歩を対比した上で、やや言葉足らずながら「主観」や「感情」に乱歩の美点を見ている点などは興味深いものである。

とはいえ、必ずしも作家的資質や人気において、不木が乱歩より劣っていたわけではない。医学的詳細に凝りすぎるあまり、しばしば「研究室をでない」と揶揄された不木だが、ほかならぬ乱歩自身、そういった不木作品の学問的興味を最も評価した作家の一人であった。また、読者の中にも「不木氏を研究室から引張り出してしまったら、誰があの思いもつかぬ考案を発表するだろう」（S・W生 『新青年』大正十五年七月号「マイクロフォン」）と

して、不木の描く、学者的な目線ならではの奇想天外な思い付きを評価する声があったことを、注意しておく。

「殺人」や「異常心理」といった、探偵小説につきものの「不健全」な興味を、学問の方面から強力で裏付け、その価値向上に尽力した小酒井不木のような専門家の存在。彼らが『新青年』中に蔓延させた「異常」に対する並々ならぬ好奇心を、ともすればそれに傾きかねない精神的弱さを備えた人間の立場からとらえ、それをただグロテスクなだけではない、心理的恐怖小説の領域にまで昇華した江戸川乱歩のような存在。こういった作家的個性が、「常態」と「変態」の境目が不明瞭になっていく世の中で、隣人ないしは、自らの正常にさえ疑問を抱かなければならなかった人々の不安と交わったところに、「変格探偵小説」の流行は、胚胎していったのだ。

注  
(1)「ノックスの十戒」は、ロナルド・ノックスによって1928年に、「ヴァン・ダインの二十則」はヴァン・ダインによって同じく1928年に発表された。いずれも推理小説をかかためにするらねばならないルールについて綴ったものであり、犯罪捜査に際しての直感や神がかり的な超能力の排除、全ての証拠物件の読者への提示など、読者が小説を読みながら論理的な謎解きを行えるようにとの意図が見られる点で共通している。

日本探偵小説文壇における「変格」流行について——大正末期『新青年』読者の視点から——

(2) このような見解を示した論の一例として、中島河太郎の「乱歩

文学の鳥瞰」(『別冊宝石』昭和二十九年十一月号)より、次の文を引く。「大正時代に入って自然主義的文芸思潮の反指定の立場から、耽美主義乃至理想主義の文学が注目されるに至った。就中中期の谷崎潤一郎・佐藤春夫・芥川龍之介の諸氏の怪奇犯罪の文学は、近代人の洗練された感覚を濾過した知的浪漫であったが、普通文学の領域では若干の追隨作品を産んだだけで、主流的地位を占めるには至らなかった。即ちその後の浪漫怪奇性は大正末期のプロレタリア文学や新興芸術派の擡頭によって、文壇の主流からは影を潜めるようになったが潤一郎・春夫、更に宇野浩二の諸作家に傾倒した江戸川氏の創作に変貌して出現したことに注目しなくてはならない。(中略) 江戸川乱歩の登場は明治以来の探偵乃至犯罪小説の影響下にあったものではなく、氏独自の海外探偵小説研究による理智文学の発見が、谷崎・佐藤氏らの浪漫主義文学に触発されて新たなジャンルを形成したもので、「二銭銅貨」以後の諸作品は単に探偵小説としての評価以外に文学史の流れの中に扱えなければならない。」

(3) このエピソードに関しては、『別冊いんなあととりつぶ』昭和五十一年四月号におさめられた横溝正史と中島河太郎の特別対談にて、横溝が語っている。「林檎の皮」を『新青年』に投稿した西田政治は、当時、横溝の親友であり、夭折した西田徳重の兄であった。

#### 参考文献

郷原 宏 『物語日本推理小説史』 講談社 平成二十二年  
中島河太郎 『日本推理小説史 第一巻』 東京創元社 平成五年  
中島河太郎 編 『江戸川乱歩 評論と研究』 講談社 昭和十五年

竹内瑞穂 『変態』という文化 近代日本の〈小さな革命〉 ひつじ書

房 平成二十六年

松本清張 中島河太郎 佐野 洋 編 『現代推理小説大系 別巻二』

講談社 昭和五十五年

付記

雑誌『新青年』は国書刊行会より刊行されている復刻版を参照・参考とした。また機関誌『変態心理』は不二出版より刊行されている復刻版を参照・参考とした。

(はらだ ひろのぶ・二〇一四年度 本学大学院博士前期課程修了)